



Title	マルセル・ブロイヤール 理性と感性
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 18-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第2回デザイン関連学会シンポジウム 発表概要

マルセル・ブロイヤー 理性と感性

藤田治彦／意匠学会／大阪大学

マルセル・ブロイヤーはヴァイマルに学び、デッサウで教員となり、その後グロピウスとともにアメリカに渡った、バウハウスを再考する上で重要な人物である。学生時代の作品〈アフリカン・チェア〉はアーツ・アンド・クラフツ運動やドイツ表現主義の影響の強い初期バウハウスの実態を伝える作例である。その後、デ・ステイルの影響を受け、構成主義的方向に進み、テンションとコンプレッションあるいはカンチレバー構造に積極的に取り組んだ。しかし、ブロイヤーの初期の代表作〈クラブチェア〉は、同時代の鋼管椅子と較べるなら、単に実用的な小椅子や肘掛け椅子ではなく、軽量の安楽椅子で、学校や民衆的なラウンジ等でも用いられ、文化的室内環境を社会に広げた。ブロイヤーは理性的または論理的イメージが強いが、社会や個人の感性を重視するデザイナーでもあった。

このような理性と感性との関係は、構造と構成とのデザインに対応する。〈エルバーフェルトの病院〉のコンペ案では階段状のカンチレバー構造を細い柱で支え、渡米後、コネチカット州ニュー・ケイナンに建てた〈ブロイヤー邸〉では、カンチレバーのベランダを細いケーブルで斜めに吊って支えた。純粹かつ豪華なライトの〈落水荘〉のそれとは異なる。

パリの〈ユネスコ本部〉の設計を契機に鉄筋コンクリート構造と打放し仕上げを展開し、ブロイヤーは世界的建築家となった。構造的に何かで支えた視覚的カンチレバーではなく、〈落水荘〉のように豪華で重量級の構造的に純粹なカンチレバーを次々と手掛け、〈クラ

ブチェア〉や〈ブロイヤー邸〉から離れて行った。しかし、デザインの特徴であるトラペゾイド（台形）には制作の連続性が見られる。構造的理想とも言える三角形と、構成的理想形態とも言える矩形との間にある、両者の性格を共有し、構造と構成をともに大切にするブロイヤーが生涯追究したかたちだった。

晩年の作、ニューヨークの〈ホイットニー美術館〉（現Metブロイヤー）は、ライトの〈ソロモン・R・グッゲンハイム美術館〉から約1キロ南のマジソン・アベニューに建てられた、〈エルバーフェルトの病院〉のカンチレバー構造の実現でもある。前衛芸術家的精神を持った論理実践家ともいえるブロイヤーの〈クラブチェア〉に込められた芸術性と論理性はここにも見られる。それはこの建物のもうひとつの特色である、マジソン・アベニューに面した西側の正面にひとつ、北側の側面各階に6つ設けられた、外に突き出すトラペゾイドの窓である。完成翌年の1967年に撮影された、その窓を背景に館内で椅子に座るブロイヤーの写真は、ルネサンス以来の西洋美術の基礎、パースペクティブの問題を想起させ、台形の窓を通して見える市街は映像にもシェイプト・キャンバスにも見える。壁に掛けられた絵画と並ぶ大小のトラペゾイドの窓は、ブロイヤーが予め各階のギャラリーに設置した、建築家としての絵画だったのではないだろうか。ライトとは異なり、幼いときは多分画家も志し、バウハウスでカンディンスキーらに学んだ造形芸術家としてのブロイヤーとバウハウスの教育について考えさせるのがこの美術館である。